

# 浄瑠璃寺



特集・お寺巡りの旅⑥

九体阿弥陀如来像（国宝・平安時代）。



阿弥陀如来坐像中尊仏。九体阿弥陀如来像（国宝・平安時代）の中央に位置する仏像。本堂（阿弥陀堂）内に安置されている。

境内の様子は三重塔が移建された頃とほとんど変わりなく、真東に薬師如来像をお祀りする三重塔、池を挟んで対岸の真西に九体阿弥陀如来像を安置している本堂（阿弥陀堂）があります。薬師如来と九体阿弥陀如来の尊像は、池を隔てて東西で向かい合っています。昔からここに水が湧いていたことから、この地にお寺を造ったようで、今でも、お寺では山からの水を使っているそうです。



三重塔（国宝・平安時代）



薬師如来像（重要文化財・平安時代）

「このお寺は、東と西の意味を表すように造られたようです。境内に入られたら、まず東の薬師如来様に礼拝してこの世に命を送り出してもらい、振り返って池越しに、西の阿弥陀様に迎えて頂く、これがこのお寺の方角の概念です」

秘仏の薬師如来様は、仏像と三重塔内壁画の保護のため、拝観は年間でも数日。開扉日でも天候が悪いと拝観できなくなります。

浄瑠璃寺のある当尾地区は、京都府の東南に位置した緑豊かな山間部にあります。そこは京都より、むしろ奈良から近いため、古来より奈良の僧侶達が、修行や念仏のため、また学問などに専心する草庵を結んだ穏やかな土地。今でもその面影は色濃く残っています。

「本尊を安置するお堂を一日で造ったのがお寺の創建」

近鉄奈良駅からバスで二〇分ほど行くと田園風景が広がり、田畑を眺めながらさらに山道を登ると、浄瑠璃寺のバス停に着きます。大通り横の道を一步入ると、そこには都会の喧騒とは別世界の、のどかな景色が広がります。浄瑠璃寺に続く細い参道の両側には馬酔木が咲き誇り、散るのを忘れたかのように梅の花が残っていました。

山門をくぐると、目の前には静かな水面の池が広がり、右手には本堂。境内は静寂に包まれていました。

「このお寺には余り記録が残っていませんのでつきりしないのですが、永承二年（一〇四七）に創建したと伝わります。薬師如来様（重文・平安時代）をご本尊として、一日で屋根を葺いて小さなお堂を造ったと言われています。行基さん



浄瑠璃寺山門。

須弥壇に並んだ九体の阿弥陀様の姿は荘厳そのもの

阿弥陀如来像が安置されている本堂（国宝・平安時代）は、その当時、京都を中心に競って建立された九体阿弥陀仏を祀るための横長堂で、現存する唯一の建物です。また、一体一体の如来が堂前に板扉を持っているのも特徴です。

お堂の扉をくぐり中に入ると、横長の須弥壇の中央に中尊仏、左右に四体の像を配置した九体の阿弥陀如来像がずらりと並んで安置されています。かすかに差し込んで来る光に照らされている姿は優しく輝き、その美しさ、荘厳さは息を飲むほどです。

「阿弥陀様の指の形、印相というのですが、その形で上生印（定印）か下生印（来迎印）かが分かります。この阿弥陀様は、中央の大きな中尊像は、遅れたもの、弱いものを救い導く働きを指す来迎印を結び、その他の八体は、理想を目指し自らを向上させる定印を結んでいます。どの仏様が上で、どれが下ということはありませんので、全ての阿弥陀様を拜んで頂きたいです」

八体の阿弥陀様は同じ印相をしていますが、お顔の表情が微妙に違い、一つひとつと眺めると、心が落ち着いていくのが感じられます。

本堂の奥には四天王像（国宝・平安時代）の持国天、增長天が祀られています（多聞天、広目天は東京国立博物館へ

が造ったとかいろいろな伝説がありますが、それを示すものは何もないんです」

と、ご住職の佐伯功勝さんは話してくださいました。その後、嘉承二年（一一〇七）に九体阿弥陀如来像（国宝・平安時代）を安置する本堂を造り、久安六年（一一五〇）に庭園（特別名勝及史跡）を造園、治承二年（一一七八）に京都一条大宮から三重塔（国宝・平安時代）を移建して、ほぼ現在の伽藍になったそうです。

東の薬師如来に送り出してもらい西の阿弥陀如来に迎えてもらう

浄瑠璃寺の敷地面積はおよそ一万坪。境内は約三千坪で、その七割を山が占めています。現在の山門は北側にありますが、昔の人々は南側の山を越えてこの寺に来ていたとか。

「ここは三方を山で囲まれています。山のすぐ向こうを通っている道が、奈良と伊賀を結ぶ昔の街道でした。境内の山向こうは二百メートル程で奈良県になるので、頑張って歩けば東大寺から徒歩で一時間ほどで来られます。だから奈良の僧侶が修行場として来ていたんだと思います」

寄託）。藤原期四天王の代表像で、全身に施された美しい彩色が今も残っています。

山門横の灌頂堂のご本尊・大日如来像（秘仏・平安末期・鎌倉初期）は、平成十八年に修復をしています。修理前は全身に金箔を貼ってありましたが、江戸時代の金箔を剥がしたお姿があまりにも素晴らしかったので、現在は漆のお姿をしています。



四天王像のうち、持国天（国宝・平安時代）



四天王像のうち、增長天（国宝・平安時代）



秘仏・大日如来像（平安末期～鎌倉初期）